

東京都遺跡調査・研究発表会

47

発表要旨



令和3年11月21日

オンライン開催

主催 東京都教育委員会
世田谷区教育委員会

共催 (公財)東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター

【表紙口絵】^{しょうどうたく}小銅鐸^{そめち}（染地遺跡第 128 地点出土）

小銅鐸とは、銅鐸のミニチュア版と考えられている青銅製の祭器です。一般的な銅鐸に比べるとサイズが小さく、高さは約 3～14 センチしかありませんが、形や模様は銅鐸を模して造られています。類例は北部九州から関東地方にかけての広い範囲で発見されているものの、その数は全国でも 60 点程度と少数です。集落内の住居跡や溝、土坑などから出土しており、時代的には弥生時代中期から古墳時代前期に属するようです。用途についての詳細は不明ですが、小銅鐸の内部に^{ぜつ}舌が残っているものも見つかったため、祭祀の際に身につけて、鳴り物として使われたのではないかと推測されています。

染地遺跡第 128 地点出土の小銅鐸は、都内で 3 例目となる資料です。高さが約 3.7cm で、半円形の^{ちゆう}鈕をもち、鈕の断面は円～楕円～菱形と一定しません。^{ひれ}鱗や模様はなく、^{たくしん}鐸身中央から少し上の部分に^{かたもちあな}一對の型持孔があります。こうした特徴は、小銅鐸の中でも「汎用型」（白井 2015）と呼ばれるグループに見られるもので、全国で 30 点ほど確認されています。

調査地内の浅い谷状の窪地から出土した本資料は、赤銅色を保った状態で見つかりました。青銅は、含まれる銅の割合が高く、錫の割合が低いと赤銅色に近くなりますが、発掘で見つかる青銅製品は多くの場合、緑青色の^{さび}錆に覆われてしまっています。本資料は低湿地に埋没していたことが幸いして、小銅鐸本来の色合いが残った、珍しいケースと言えます。

（文・間 直一郎）

引用文献

白井久美子 2015 「小銅鐸同工品の検討」『千葉大学大学院人文社会学科研究プロジェクト報告書』89-98

参考文献

千葉県 2002 『千葉県の歴史 資料編 考古 2（弥生・古墳時代）』（県史シリーズ 10）財団法人 千葉県史料研究財団

朝霞市博物館 2016 『第 31 回企画展 小さな銅鐸を追って～銅鐸形土製品と小銅鐸～』

大阪府立弥生文化博物館 2018 『平成 30 年度夏季特別展 弥生のマツリを探る 祈りのイメージと祭場』

目 次

【午前の部】

発表1 10:00～10:35
小平市 くにしせきすずき 国史跡鈴木遺跡 小川 望・高田賢治 2
(下線=発表者)

発表2 10:35～11:10
世田谷区 どうがやと 堂ヶ谷戸遺跡 品川裕昭 4

休 憩 5分

発表3 11:15～11:50
港区 たかなわみなみまち 高輪南町遺跡 橋本 望 6

発表4 11:50～12:25
調布市 そめち 染地遺跡 間 直一郎 8

昼 休 み 35分

【午後の部】

公開講演 13:00～14:00
『古墳時代の野毛と上毛野』
せつかん はにわ せきせいも ぞうひん - 石棺・埴輪・石製模造品の生産と供給にみる首長間交流 - しゅちやう 寺田良喜 10

休 憩 5分

発表5 14:05～14:40
世田谷区 しものだ 下野田遺跡 村上育士 12

発表6 14:40～15:15
八王子市 くにしせきはちおうじじょうあと 国史跡八王子城跡 村山 修 14

1 小平市 国史跡鈴木遺跡

時代 旧石器時代、縄文時代、近世～現代

遺構 石器集中部・礫群（旧石器）、^{おと}陥し穴（縄文）

遺物 局部磨製石斧・ナイフ形石器ほか（旧石器）

キーワード 国指定史跡化、保存・活用・整備

調査概要

前回を含め、この遺跡調査研究発表会で、これまで3回報告させていただいた鈴木遺跡が、本年、令和3年3月26日に「後期旧石器時代の最大級の拠点の遺跡」として国史跡に指定されました。まずは御協力賜った諸機関、諸氏に御礼申し上げます。

東京都小平市に所在する鈴木遺跡は、石神井川の谷の先端部に立地します。昭和49年（1974）の小学校の建設工事に先立つ本格的な発掘調査を嚆矢とし、その後の様々な原因での調査を通じて、旧石器時代の石器44,203点、礫77,852点の出土を、54冊に上る発掘調査報告書において報告してきました。

平成20年代に入り、遺跡の中枢部に位置付けられる農林中央金庫小金井研修所の閉鎖とその開発計画を契機に遺跡の国指定史跡化が具体化することになり、平成25年度から鈴木遺跡国指定史跡化推進事業を開始しました。そこでは前回述べた鈴木遺跡発掘調査総括報告書の作成が最大の課題でしたが、多くの方々の御協力により、無事、令和2年3月に刊行、同7月にはこれを添えて文化庁へ国指定史跡に向けた意見具申書を提出することができました。また、この総括報告書のデータに基づいて、一般向けの概要版解説書『旧石器時代の鈴木遺跡』を作成し、指定告示後の令和3年3月末からは、鈴木遺跡資料館等での配布を行っています。また小学生向けの解説リーフレット『鈴木遺跡たんけんマップ』の改訂版も作成し、市内小学校の児童全員への配布を行うなどの形で、市民への還元を行っています。

新型コロナウイルス感染症の影響で、集客型のイベントが行えなかったため、市報での特集記事、市役所壁面の懸垂幕、市内公共施設でのフラッグの掲出などで国史跡化を周知したほか、市役所玄関ロビーや中央図書館等の公共施設の一角をお借りして、記念のパネル展示を行いました。

一方、上記小金井研修所跡地は、南半分が開発の対象となり、やはり前回報告しましたように、石神

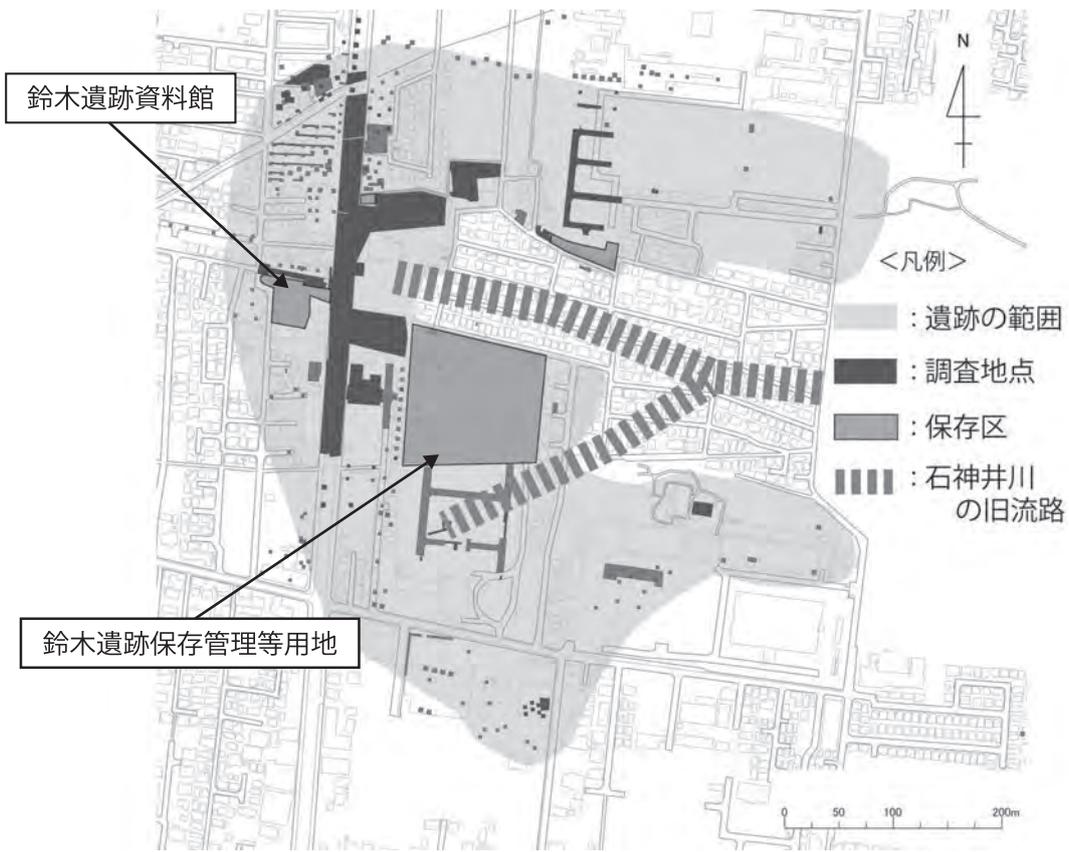
井川の源流付近の南側の支流を確認することができました。残りの北半分は所有者の御協力により小平市に寄贈されました。この部分は、鈴木遺跡保存管理等用地として既に研修所の建物やプール等の撤去を終え、今後の整備に向けて、安全確保を行いつつ、樹木の剪定や除草等の管理を行っています。

今後は、まず鈴木遺跡の保存活用計画を定め、これを基本的な指針として遺跡の保存及び活用に力を入れていきます。史跡指定地には、遺跡保存区や鈴木遺跡資料館敷地、公園、市道等の公共用地と、緑地保全地区や駐車場となっている民有地がありますが、公共用地の中でも遺跡範囲の中央に位置し、最も広い面積をもつ鈴木遺跡保存管理等用地は、鈴木遺跡の中枢部と想定されるため、今後、後期旧石器時代の生活の様子を感じられる場所として、市民の意見を聞きながら整備を進め、令和10年以降の一般開放を目指します。

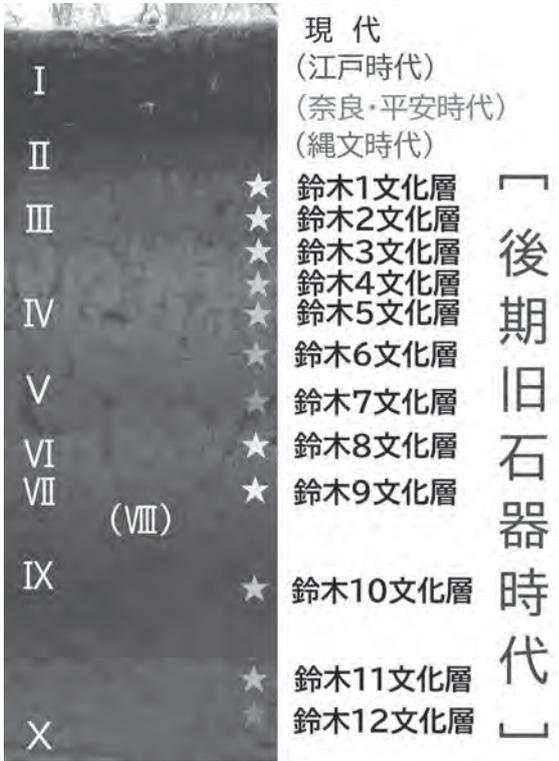
また来場者に遺跡への理解を促すための、鈴木遺跡ガイド施設を整備します。現在は既に鈴木遺跡資料館が国史跡指定地内に開館していますが、史跡の破壊につながるような工事を伴う新規建て替えは行わず、当面は既存資料館の展示室を改装し、常設展示のリニューアルを行います。リニューアルはまずアプリケーションを利用した音声ガイドやARを導入するなどのソフト面から始め、デジタルサイネージなどのハード面へと段階的に進めていきますが、いずれは耐用年数を迎え、解体せねばならなくなることから、将来的には国史跡指定地外に用地を確保して、そこでの本格的なガイド施設のオープンを想定しています。

周知普及事業としては、前述の刊行物のほか、新型コロナウイルス感染症の終息状況を前提として、『歩いて学ぼう鈴木遺跡』という専用のリーフレットを手に、学芸員の解説を聞きながら実際に遺跡現地を歩いて地形観察をする遺跡ウォーク事業「こだいらの遺跡をあそぶ」や、旧石器時代当時と同様の素材や製作技法を用いて石器製作体験をしてもらう文化財体験講座「ナイフ形石器を作ろう！」などの体験事業も引き続き積極的に開催し、史跡鈴木遺跡の周知・普及に努めてまいります。

遺跡の国指定史跡化への道のりと、今後の保存活用および史跡整備に向けた取組の現状



第1図 鈴木遺跡の範囲と保存区



第3図 鈴木遺跡保存管理等用地の現状

第2図 鈴木遺跡の地層と文化層

2 世田谷区 堂ヶ谷戸遺跡

時代 旧石器時代、縄文時代、古墳時代

遺構 住居跡・土坑

遺物 縄文土器

キーワード 環状集落

調査概要

堂ヶ谷戸遺跡は、標高約 40 m の武蔵野段丘面上に立地する旧石器時代から近世に至る複合遺跡で、東京都世田谷区岡本二丁目 33 番一帯に所在しています。遺跡は、多摩川に注ぐ支流、谷戸川と仙川の合流点に向かって延びる台地の先端部から基部にかけて位置しており、推定範囲は東西約 360 m × 南北約 540 m と推定されています。

本遺跡の周辺は、区内でも最も多く遺跡が集中する地域で、大蔵遺跡、下山北遺跡、下山遺跡などの集落跡が台地上にあり、台地斜面には西谷戸横穴墓群、岡本谷戸横穴墓群などの横穴墓群が分布しています。

本遺跡では昭和 25 年（1950）に初めて発掘調査が行われ、古墳時代後期の住居跡が調査されています。その後、昭和 48 年（1973）の 2 次調査から現在まで 62 回の発掘調査が行われ、旧石器時代のブロックや礫群、縄文時代～古代の住居跡約 280 軒が調査されています。今回は、62 回の発掘調査で明らかになった縄文時代中期中葉から後葉の集落について報告します。

本遺跡における集落の開始時期は、勝坂 1 式期後半（新道式段階）と考えられています。住居跡は北東側の台地縁辺部に位置する 32 次調査区で 1 軒調査されています。次の勝坂 2 式期前半（藤内 I 式段階）では引き続いて北東側の 50 次調査区で住居跡がみられ、32・50 次調査区周辺に小規模な集落があったと推定されています。また、この段階までは阿玉台式土器が主体ですが、次第に勝坂式土器に移行していきます。それに伴って住居跡が台地中央の平坦部から南側の緩斜面に移っていくと考えられ、環状集落を形成するようになります。集落は勝坂 3 式期前半（井戸尻 I・II 式段階）にピークとなり、住居跡は南側の緩斜面下方の 45 次調査区まで構築されるようになります。次の勝坂 3 式期後半（井戸尻 III 段階）の住居跡は確認されてなく、空白期となっています。

加曾利 E 式期になると環状集落の規模は少しずつ縮小していき、加曾利 E 3 式期新段階までは継続することがわかっています。その後、環状集落は解体され、加曾利 E 4 式期になると台地先端部に近い 47 次調査区で土坑墓が検出されており、この周辺に小規模な集落があったと推定されます。

このように本遺跡における環状集落の範囲は、北側は 34 次調査区付近、東側は 60 次調査区東端付近、南側は 45 次調査区、西側は 7・42 次調査区付近までと考えられ、規模は南北約 190 m × 東西約 150 m を測ります。

次に、集落の内側については、21・61 次調査区で墓域の一端が明らかになってきています。いずれの調査区も加曾利 E 式期の住居跡と一部重複するような形で土坑・ピットが分布しています。21 次調査区で調査された土坑の中には勝坂 2 式の小形深鉢が副葬された土坑やヒスイの大珠が副葬された土坑があります。また、61 次調査区では顔面把手付土器が副葬された土坑が見つかっています。

顔面把手付土器について詳しくみてみましょう。土器は口縁部の一部が欠損するほぼ完形品で、土坑の底部から正位の状態で出土しています。器形は樽形で、胴下半部は「く」字状をしています。顔面は細い目でつり上がり、口は三角形状をしています。把手側面には三叉文、裏面には渦巻文と三叉文が施されています。また、胴上半部には連続爪形文や刻みを有する隆帯で三角形などの区画がみられ、区画内には三叉文や角押文、胴下半部には横走する沈線間に縦位の沈線が施されています。

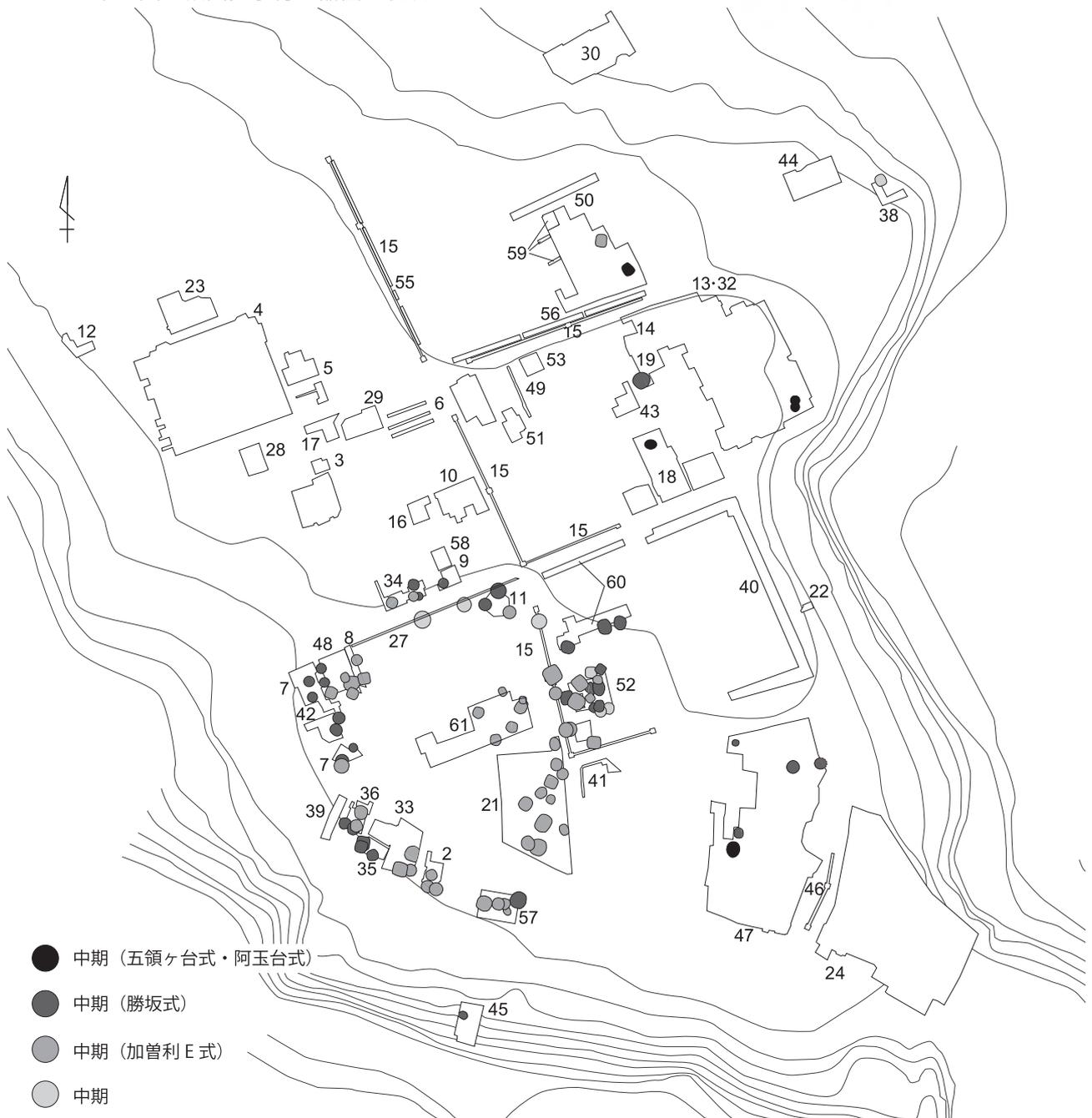
顔面把手付土器は、勝坂 2 式前半（藤内 I 式段階）以降にみられるもので、勝坂 3 式期前半（井戸尻 I・II 式段階）に一気に広がり、勝坂 3 式期後半（井戸尻 III 式段階）に衰退する傾向がみられます。今回出土したものは、勝坂 2 式でも古い段階に位置づけられ、さらに古くなる可能性も考えられます。



第1図 顔面把手付土器出土状況



第2図 顔面把手付土器



第3図 堂ヶ谷戸遺跡 縄文時代中期の住居跡分布図

3 港区 高輪南町遺跡

時代 縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、近世、近代

遺構 竪穴建物跡・方形周溝墓（弥生）、竪穴建物跡（古墳・奈良・平安）、祭祀跡（古墳）

遺物 土器・石器・金属製品（弥生）、土師器（古墳・奈良・平安）、須恵器（奈良・平安）、石製品（古墳・奈良）、金属製品（奈良）

キーワード 拠点集落、方形周溝墓、馬具

調査概要

高輪南町遺跡は港区南部の高輪三丁目に所在する遺跡で、JR品川駅から西に500mほどの武蔵野台地東端の縁辺部に立地しています。この付近は高輪台地と呼ばれ、北側は古川（渋谷川）、南側は目黒川に面し、東側は東京湾に臨んでいます。

本遺跡の北方には、亀塚・亀塚公園遺跡や伊皿子貝塚遺跡が所在しており、弥生時代中期～後期の集落跡や方形周溝墓などが検出されています。また、西方の台地上に立地する品川区池田山北遺跡では、竪穴建物跡や環濠を伴う後期の集落跡が発見されています。

今回の発掘調査は、東京都都市整備局による東京都計画道路事業幹線街路環状第4号線の整備に伴い、平成30年7月から令和2年12月まで、整理調査期間を挟みながら7,780㎡の調査を行いました。

調査により、縄文時代から近代までの遺構・遺物が検出されましたが、なかでも弥生時代後期の大規模集落の存在が判明した点で注目されます。

弥生時代 後期（約2,000～1,800年前）の竪穴建物跡が調査地全域にわたって72軒検出されました。この時期の竪穴建物跡の平面形は隅丸方形を呈し、概ね北西方向に主軸を揃えて建てられています。ほとんどの建物跡は互いに重なり合わないことから、集落は比較的短期間に形成されたことがわかります。

その他の遺構としては、一辺7～8mを有する方形周溝墓2基が検出されました。そのうちの1基は、おそらく周溝に陸橋部を持たず、溝が全周するタイプと推定されます。これら2基の方形周溝墓は、周溝の一辺を共有する形で構築されていたことがわかりました。この地域における、当時の有力者の墓と考えられます。

出土遺物としては、壺や甕、高坏などの土器、砥石などの石器の他、土製勾玉や銅鏃といった貴重な遺物も含まれています。

古墳時代 前期～後期（約1,700～1,400年前）の竪穴建物跡6軒と土坑状の祭祀跡が検出されており、主に調査地の東側に偏って分布しています。時代によって居住域が移動していたのかもしれませんが。

竪穴建物跡からは、坏や蒸し器である甑や甕などの土師器が出土しました。また、祭祀跡からは糸を通してつながっていたと推測される石製（ヒスイ？）の勾玉1点と管玉5点が検出され、その付近からは滑石で剣をかたどった剣形模造品も見つかっています。これらの祭祀に伴う遺物は、倭王権との交流によりもたらされた可能性があり、当時の政治的動向を窺う重要な遺物です。

奈良・平安時代 竪穴建物跡が8軒検出されており、調査地の北西をのぞく古墳時代より広い範囲に分布しています。このうちの1軒は都内でも稀な一辺7mにも達する規模の大型建物です（第7図）。古いカマドを壊して新しいカマドを作り直していることなどから、少なくとも一度は建て替えられたことがわかりました。

遺物としては、土師器や須恵器などの土器、滑石製の紡錘車（糸に撚りをかける道具）の他、馬具の鏝に付属する鉸具（鞍の革ベルトに装着する器具）が検出されており、この地域での馬の利用が窺える資料です。

歴史地理的な環境からみて、古代の交通路としての中原道との関係も想定されます。

近代 明治時代に建てられた、旧皇族の北白川宮邸に伴う建物基礎などが検出されました。

調査の成果

今回の調査では、港区では最大級となる弥生集落を確認しました。集落の規模からみて、東京湾西岸地域における拠点的なムラの一つであった可能性があります。また、集落だけでなく同時代の墓域も確認したことで、当時の人々の生活を復元する上でたいへん重要な資料が得られました。

区内では初となる奈良時代の馬具の出土も、当時は貴重だった馬がどのような形で利用されていたかを知る大きな手掛かりとなることが期待されます。

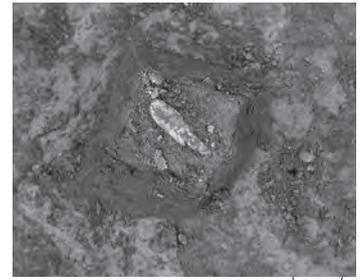
港区で最大級となる弥生時代集落や、奈良時代の馬具を検出



第1図 1号方形周溝墓全景



第2図 15号竪穴建物跡
遺物出土状況



第3図 81号竪穴建物跡
銅鏃出土状況



第5図 F-1区全景



第6図 67号遺構勾玉・管玉出土状況



第7図 7号竪穴建物跡全景



第8図 弥生時代後期の壺



第9図 奈良時代の鉸具

4 調布市 染地遺跡 (第 128 地点)

時代 縄文～古墳時代、平安時代、中世、近世

遺構 竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、土坑、ピットなど

遺物 縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土製品、石器、石製品、ガラス製品、木製品、金属製品（小銅鐸）、陶磁器など

キーワード 府中崖線下の低地、集落、小銅鐸

調査概要

当センターは東京都住宅供給公社から委託を受け、令和元年8月から染地遺跡第128地点の発掘調査を実施いたしました。屋外での調査は令和3年2月に終了し、現在は室内にて整理調査を進めております。

染地遺跡は、多摩川中流域左岸の府中崖線下に当たる沖積低地に立地し、染地二丁目から三丁目にかけて約360,000㎡の広さを有します（第1図）。発掘調査は昭和41年（1966）から行われ、令和2年度末時点で180地点が調査されています（うち、試掘・本調査は59地点）。その結果、弥生時代から古代にかけての竪穴住居跡が多数見つかかり、当時この地域に大集落があったと考えられるようになりました。

第128地点では約6,476㎡を対象に調査を行い、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物を検出しました（第2図）。調査区中央には東西へ伸びる浅い谷状の窪地があり、その南北に竪穴住居跡が高密度で並んでいる様子が明らかになりました。

縄文時代 明確な遺構は確認できませんでしたが、縄文時代晩期後半から末期の安行3c・3d式土器や浮線網状文土器が出土しています。

弥生時代 後期の竪穴住居跡が27軒確認され、この地の集落の始まりが弥生時代に遡ることが確実となりました。一辺10mを超える大型の住居や、壁面が赤く焼けた住居などが検出されています。加えて、地震で生じたと思われる噴砂の痕が、住居の床や壁を貫いている点も注目されます（第3図）。遺物は久ヶ原式・朝光寺原式・吉ヶ谷式土器が主で、石器や土製品も少量ですが出土しています。また、当時貴重だった青いガラス製の小玉も見つかっています。

古墳時代 竪穴住居跡44軒、土坑2基を調査しました。前期は8軒検出され、主に調査区の北東側に集落が展開します。中期は15軒が南北に分かれて広が

り、中には1辺約8mの大型住居も見られます。後期は21軒検出し、南側に集落の主体があります。中期から後期の竪穴住居跡に伴うカマドには、他地域で見られる長煙道型のものが含まれています（第4図）。また、後期の竪穴住居跡の中には、板や杭で囲いを設けた痕跡の残る貯蔵穴も確認されました（第5図）。調査区北東隅の土坑2基は中期の墓壇と考えられ、土師器の坏や副葬品らしき白玉が数十点出土しました。主な遺物は五領式・和泉式・鬼高式の土師器で、初期須恵器を含む須恵器や石器、土製品も少量出土しています。勾玉・管玉といった玉類や、剣形などの滑石製模造品も見つかっています。

平安時代 竪穴住居跡1軒を検出しました。遺物は土師器、須恵器が主体で、わずかながら緑釉陶器、灰釉陶器が出土しています。墨書の残る土師器片も数点認められました。

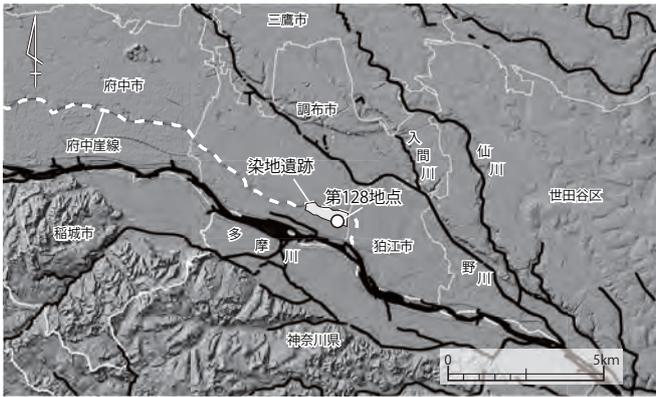
中・近世 中世から近世にかけて溝が65条確認されたほか、柱穴や土坑が複数検出されました。溝には、道路跡や区画溝、さらに耕作にかかわる畝間溝があると考えられます。中世の遺物は国産の陶器片、かわらけ、舶載青磁が認められ、近世では陶磁器片、漆器碗、火打石などの石器、銭貨・煙管などの金属製品が出土しています。

その他の遺構 調査区中央の窪地は時期を特定できていませんが、弥生時代には既に存在していた可能性が考えられます。この窪地からは、建築材や木製品が出土しました（第6図）。さらに、小銅鐸と呼ばれる、銅鐸のミニチュアも見つかりました（第7図）。小銅鐸は全国でも60点ほどしか報告されていない貴重な出土品で、都内での発見は本資料で3例目となります。しかも今回は、赤銅色を保った状態で出土しました。銅製品は緑青色の錆に覆われることが多いのですが、染地遺跡の場合は低湿地に位置していることが幸いしたようです。

調査の成果

幅広い時代の遺構・遺物が見つかり、この地が長らく人々の暮らしに利用されていたことが明らかになりました。今後は整理調査を通じて、時代による土地利用の変遷や、噴砂が示す地震と遺構との関係についても調査を進めていきます。

都内3例目となる小銅鐸が出土した低地の集落遺跡



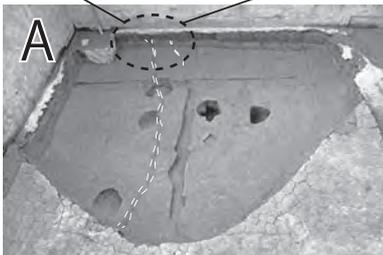
第1図 染地遺跡の位置(国土地理院基盤地図情報[数値標高モデル]データを加工して作成)



第2図 染地遺跡第128地点全景(北東から)



拡大



第3図 住居内の噴砂痕(白破線部分が噴砂)



第4図 長煙道カマドの調査風景(煙道の長さ約1.5m)



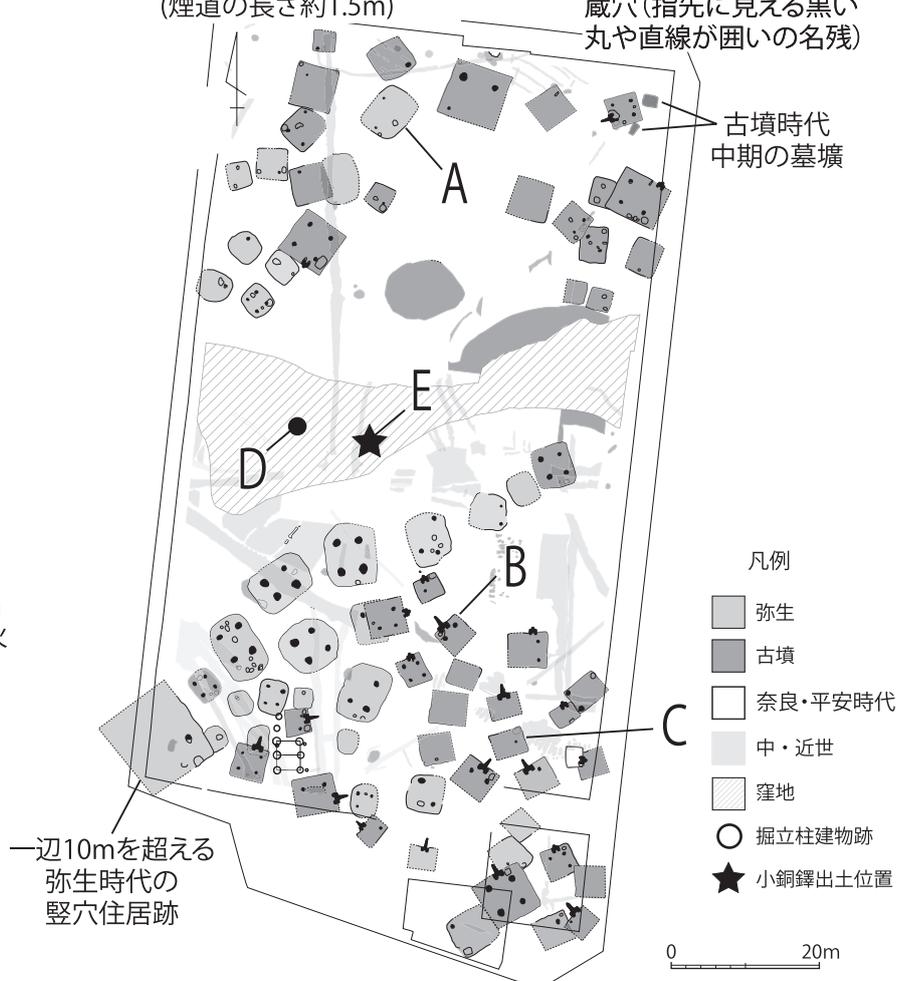
第5図 板や杭の痕跡が残る貯蔵穴(指先に見える黒い丸や直線が囲いの名残)



第6図 窪地から出土した木製品(曲げ物の底板、裏面は火きり白に転用)



第7図 小銅鐸(銅の含有比率が高い青銅製)



第8図 染地遺跡第128地点 遺構全体図(調布市教育委員会が調査を行った第21地点を含む)

公開講演 『古墳時代の野毛と上毛野』

—石棺・埴輪・石製模造品の生産と供給にみる首長間交流—

寺田 良喜

はじめに

世田谷区野毛（荏原郡）、横浜市中区野毛（久良岐郡）に残る地名の由来＝「野毛」は「毛野」の転か？といわれている。

武蔵国は無邪志、胸刺と知々夫の3国（地域）が集約されたとみる。

1 野毛古墳群と喜多見・狛江古墳群

多摩川左岸、国分寺崖線上の台地端部、世田谷区尾山台から上野毛にかけて広がる古墳群で、東南側は大田区田園調布古墳群に続き、あわせて荏原台古墳群ともよばれる。現時点で判明している古墳の数は、野毛古墳群が約40基、田園調布古墳群が約33基である。

また、多摩川中流域左岸の低位台地（立川面）に世田谷区喜多見から狛江にかけて広がる一連の古墳群は92基がある。

2 長持形石棺

畿内では4世紀末の藤井寺市津堂城山古墳をはじめ、5世紀前半の大仙古墳（伝仁徳陵）など「大王墓」に使用されているが、東国では出土例が稀少で、長持形石棺には3ランクの階層構造がみられる。

最上位は東国最大の大型前方後円墳、上毛野の太田天神山古墳、次いでお富士山古墳、下総の三分目大塚山・上総の高柳銚子塚はこれに次ぐ大型前方後円墳であり、最下位の野毛の天慶塚は帆立貝形ないし造出付円墳の墳形である。

なお、野毛古墳群の石棺の石材は全て海成層砂岩で、三浦半島産である可能性が高い。

3 埴輪

これまでに行われた埴輪粘土の蛍光X線分析の結果から、野毛・喜多見・狛江古墳群には埴輪の樹立が行われた全期間を通じて、生出塚系埴輪は供給されない様相が明らかになった。

南武蔵（以下、胸刺と呼ぶ）における埴輪の生産と供給体制は、出現期の野毛大塚では、毛野工人の

後は、毛野・比企の工人による南武蔵在地での出張生産（田園調布窯・川崎市白井坂窯）に移行し、5世紀終わり頃からは、毛野・比企系窯の製品が搬入される。

これに対して、6世紀前半以降、田園調布・多摩郡西部、橘樹郡・久良岐（倉楨）郡域においては、毛野・比企系に加えて、生出塚系の埴輪の搬入が顕著になる。

4 石製模造品

石製模造品は胸刺の古墳では野毛古墳群の首長墳のみに副葬されている。

野毛大塚では第1→第3→第2主体と連続的に副葬され、これと並行する時期の天慶塚、八幡塚にもある。（御岳山古墳は、副葬された部分が未発掘なため、確認できない）

野毛大塚第1主体部の石製模造品は畿内産と考えられるが、それ以外は上毛野、とりわけ藤岡周辺の石材を使用した製品が連続して供給されている。

おわりに

野毛古墳群の首長墳は、野毛大塚に始まり、出現から消滅まで帆立貝形ないし造出付円墳の墳形が継続している。

転機は5世紀末の狛江亀塚古墳の築造で、その規模は、併行する野毛の首長墳、狐塚を凌駕する。亀塚古墳は帆立貝形の墳形、在地のブリッジと周溝の土器祭祀などの要素を兼備する。

そして、6世紀前半の最後の首長墳＝野毛2号墳は、全長35m、短小な前方部が大きく撥形に開く帆立貝形古墳で、その墳形は群馬県高崎市情報団地古墳群等の毛野の古墳に酷似している。また、埴輪も藤岡の本郷窯の製品が搬入される。

首長間交流・物流において、古墳時代中期から後期初めにかけて、上毛野と密接に結びついていた野毛の首長は「武蔵国造の乱」の「小杵」だったのか？

5 世田谷区 下野田遺跡

時代 旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世、近世

遺構 集石・陥し穴（縄文時代）、竪穴住居跡・溝（古墳時代）、竪穴住居跡（奈良・平安時代）、土抗・溝（中・近世）

遺物 石器（旧石器）、土器・石器（縄文）、土師器・須恵器・石製品・金属製品（古墳～奈良・平安）、陶磁器・石臼・銭貨（中・近世）

キーワード 石製模造品、古墳時代の集落、中・近世の大型の溝

調査概要

下野田遺跡は世田谷区南西部の喜多見六・七丁目に広がる遺跡で、野川の左岸、国分寺崖線下の立川段丘面上に立地します。本遺跡では弥生時代を除き、旧石器時代から中・近世までの遺物・遺構が検出されましたが、なかでも古墳時代から奈良・平安時代の竪穴住居跡を中心とした遺構群や、中・近世の溝などが注目されます。周辺では、本遺跡に隣接する国分寺崖線下に下神明遺跡・砦中学校遺跡・嘉留多遺跡など、古墳時代や平安時代の竪穴住居跡が検出されています。また、崖線下に砦中学校古墳群が立地し、近隣の崖線斜面上には横穴墓群が点在するなど、当時の墓域としても利用されています。さらに国分寺崖線下の立川段丘面上では、本遺跡から南に約700m離れた多摩川左岸に喜多見陣屋遺跡があり、古墳時代や奈良・平安時代の集落跡、中・近世の居館・陣屋跡が検出されています。今回の調査は、中日本高速道路株式会社による東京外かく環状道路建設事業に伴うもので、平成27年7月から令和2年10月まで、整理作業期間をはさみながら15,693㎡の発掘調査を実施しました。その後、令和3年度末の報告書刊行に向けて整理作業を行っています。

古墳時代 今回の調査で最も多くの遺構・遺物が検出され、前期～後期の集落が営まれていました。遺跡周辺の地形は現在では平坦に見えますが、当時は1～1.5m程度の高低差の起伏があったと想定されます。この微高地は、古い流路に向けて舌状に延びており、古墳時代の竪穴住居跡はいずれも微高地上に密集し、47軒が検出されました。この中でも注目されるのは、中期のE13号住居です。この地域・時

期の平均的な住居跡が6m前後の方形であるのに対し、E13号住居はおよそ長辺8.5m、短辺6mの長方形をしています。また、出土した遺物には須恵器の蓋と坏など、この時期では貴重なものが含まれており、遺物の面からも特徴的です。また、E13号住居から東に20mほど離れた、中期のG5号住居からは、祭祀に使ったとされる、剣の形を模した石製品（石製模造品）や勾玉が出土しており、集落の中でも重要な役割を担った区域であることが想定されます。**奈良・平安時代** 古墳時代に比べ検出された遺構・遺物の数は少なくなり、竪穴住居跡は12軒検出されました。ただし、調査範囲の北側に3軒の住居跡が密集して検出されたことから、調査区外に集落の中心が移動した可能性も想定されます。古墳時代の集落よりも0.7mほど標高の低い地点からも住居跡が検出されるようになり、この時代の環境や土地利用と併せて検討すべき課題といえます。

中・近世 明確な建物跡と想定される柱穴などは検出されませんでした。土抗や大型の溝などが検出されています。特に溝は、深さ0.8m、上幅3m、下幅1m程度の逆台形の断面形をしています。調査区西側で検出されたN3号溝では、溝の一部が長さ8m、幅7mほどの舌状に突き出す大きな掘り込みをもっていることが特徴的です。この溝や掘り込みの性格については調査中ですが、南にある喜多見陣屋遺跡の陣屋跡と何らかの関係性があるものと想定されます。この時代の遺物は多くありませんが、石製の下臼や板碑の破片などが出土しています。

調査の成果

今回の調査では、微高地を中心に古墳時代～奈良・平安時代の集落が展開した様子が判明しました。また、土地利用については竪穴住居跡の分布の違いから、同時代のなかでも時期差があると想定されます。中・近世の様相は大型の溝や掘り込みについて、文献記録も含めた今後の調査の進展が期待されますが、本遺跡はいずれの時代においても重要な役割を担った場所であったといえます。

微高地を中心に展開した遺跡。集落の変遷と土地利用の変化の手がかりに。



第2図 N3号溝全景



第3図 E13号住居全景



第4図 E13号住居遺物出土状況



第5図 E13号住居出土遺物



第1図 下野田遺跡遺構集中区平面図



第6図 勾玉と石製模造品



第7図 F区全景



第8図 石白出土状況

凡例

- 古墳時代
- 奈良・平安時代
- 中・近世

0 1/1200 50m

6 八王子市 国史跡八王子城跡

時代 戦国時代

遺構 礎石建物跡、敷石遺構

遺物 陶磁器、土師質土器、金属製品

キーワード 礎石建物跡、石に囲まれた炉状の遺構

調査概要

令和2年6月、東京都で初めての日本遺産となった「霊気満山 高尾山 ～人々の祈りが紡ぐ桑都物語～」の構成要素の一つである国指定史跡八王子城跡は東京都西部に位置する八王子市の西側、元八王子町、下恩方町、西寺方町にまたがって存在し、関東山地から派生した標高460mの深沢山と呼ばれる山頂を中心に地形を巧みに利用して造られた山城です。築城者は小田原城を拠点として関東地方で活躍した小田原北条氏の三代目北条氏康の三男、北条氏照になります。築城時期についてははっきりとはしていませんが、残されている文書から天正10年(1582)頃から築城が始まったと思われます。氏照は八王子城に移る前は、八王子市内に存在する滝山城を居城としていました。この城から八王子城に移転した時期もはっきりとはしていませんが、現存する史料から天正15年(1587)3月以前に移転したと考えられます。築城時期や移転時期、移転理由などはっきりしないことが多い八王子城ではありますが、落城時期については、天正18年(1590)6月23日関東侵攻を行っていた豊臣軍の前田利家・上杉景勝などの攻撃によって一日で落城しました。

八王子城は主に5つの地区に分かれており、本丸を中心に山の要害に造られた曲輪群を要害地区、城主氏照が政務、居住をしていたと思われる山裾に築かれた曲輪群を居館地区、居館地区の南側の曲輪群を太鼓曲輪地区、家臣団の居住地区があったと思われる根小屋地区、根小屋地区の東側にあたる御霊谷地区になります。

今回の調査となる御主殿は居館地区の最も重要な位置となります。御主殿の調査は平成4・5・21・25年度に行われました。平成4・5年度は礎石を有する大型建物跡が2棟、その建物の周辺に水路跡、庭園状の遺構が検出されました。遺物は約7万点という数が出土しました。しかし、多量の遺物が出土していますが、完形の形で出土するものは少なく、ほと

んどが破片となっている状態でした。この中で注目される遺物として、イタリアベネチア産のレースガラス器があります。戦国時代のお城ではレースガラス器は八王子城でしか出土しておらず、なぜここに海外のものが持ち込まれたのかはわかっていません。平成25年度の調査では会所と呼ばれる建物北側の庭園状遺構を調査し、池を持つ庭園であることがわかりました。このことにより北条氏の文化のレベルの高さを窺い知ることができました。

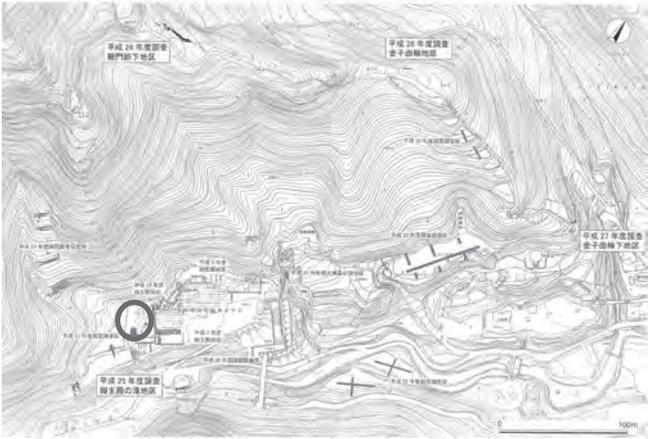
今回の調査は平成4年度に行われた場所の西側にあたります。この場所は大型建物群が見つかった場所より約30cm高くなっています。確認された遺構は礎石を持つ建物跡、敷石遺構などです。

礎石を持つ建物跡(以下建物跡)は5個の礎石が見つかりました。これまでの調査では、礎石に柱が焼き付き、柱の大きさがわかる跡が残されていましたが、今回の調査では柱の大きさがわかるようなものではありませんでした。礎石の間隔は南東-北西軸の礎石列は192cmを基本とし、南西-北西軸の礎石列は306cmになります。南東-北西軸の礎石列は一部間隔が384cmとなり、一つ礎石を飛ばした間隔となっている場所がありました。この一つ礎石を飛ばした間隔の中の場所に、石で囲まれた炉状の遺構が2か所見つかりました。この2か所の炉状の遺構の間には2列の石列が確認されています。これまで建物の中に炉状の遺構を持つものは見つかっておらず、今までの建物とは違う目的で建てられたものであったものと考えられます。この建物は、建物内の施設と考えられる炉状の遺構が、西側に延びていることから、まだ調査が行われていない西側に続いているものと考えられます。

遺物は中国から輸入された磁器の小坏、皿、碗、青磁盤、瀬戸美濃系の皿、天目碗、挿鉢、小壺、常滑系の甕、土師質土器の皿、銅製の半鐘片、銅製の鉄砲弾、永楽通宝、鉄製の鉄砲弾、鉄釘などが出土しています。磁器片は平成4年に検出された磁器がまとまって検出された舶載磁器集中域の近くで出土しました。

今回の炉状の遺構を中に有する建物跡の検出は、主殿、会所と二つの建物との位置関係や構造などの違いなどを検討し、御主殿の使われ方を考える上で貴重な資料を与えるものとなりました。

八王子城跡御主殿において、炉状の遺構を持つ新たな礎石建物跡を検出



第1図 調査位置図 (○内が調査位置)



第3図 調査区全景



第4図 礎石建物跡



第5図 敷石遺構

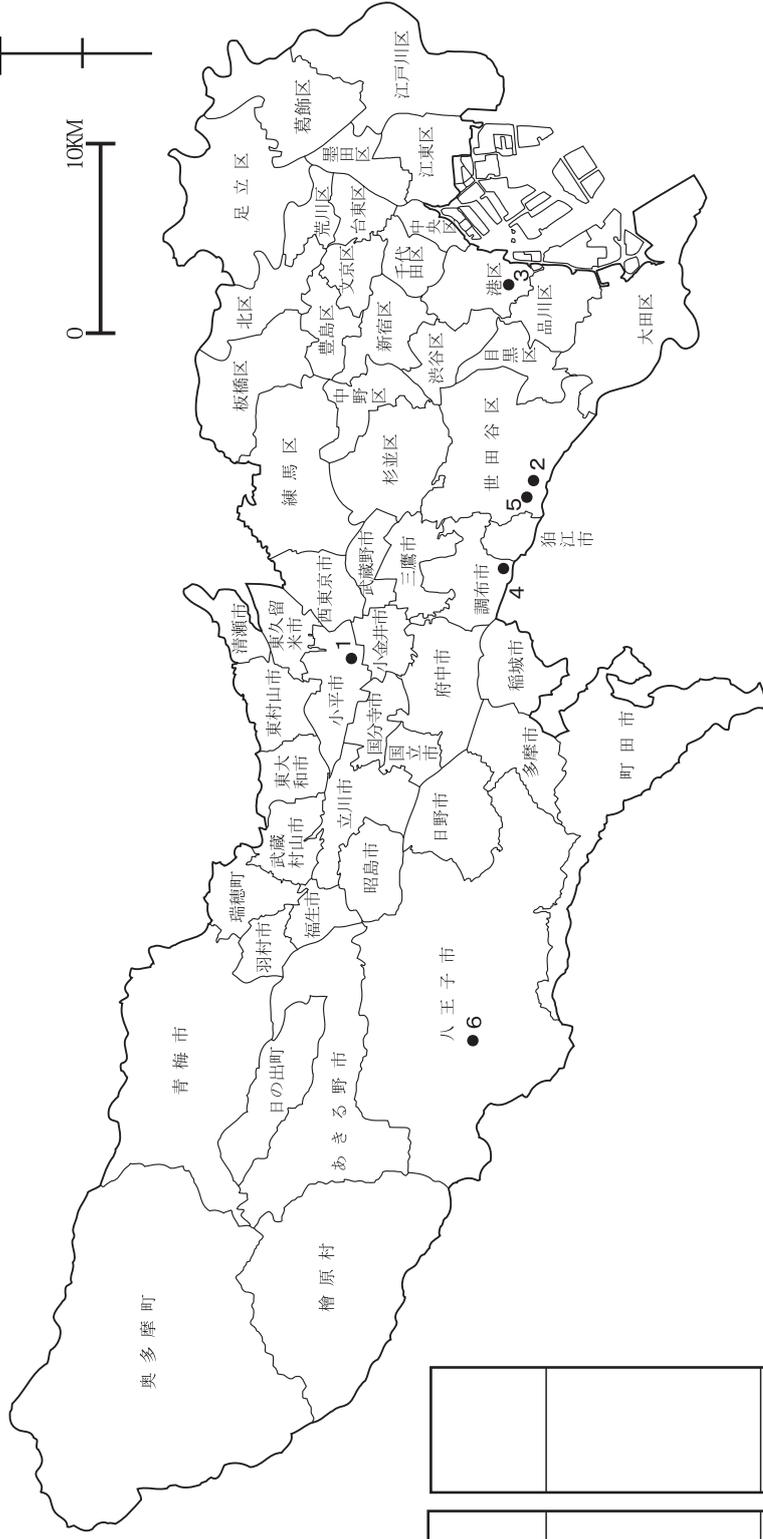
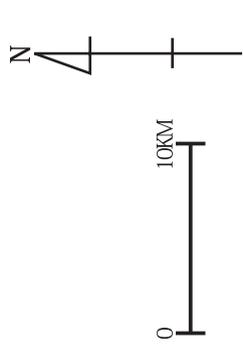
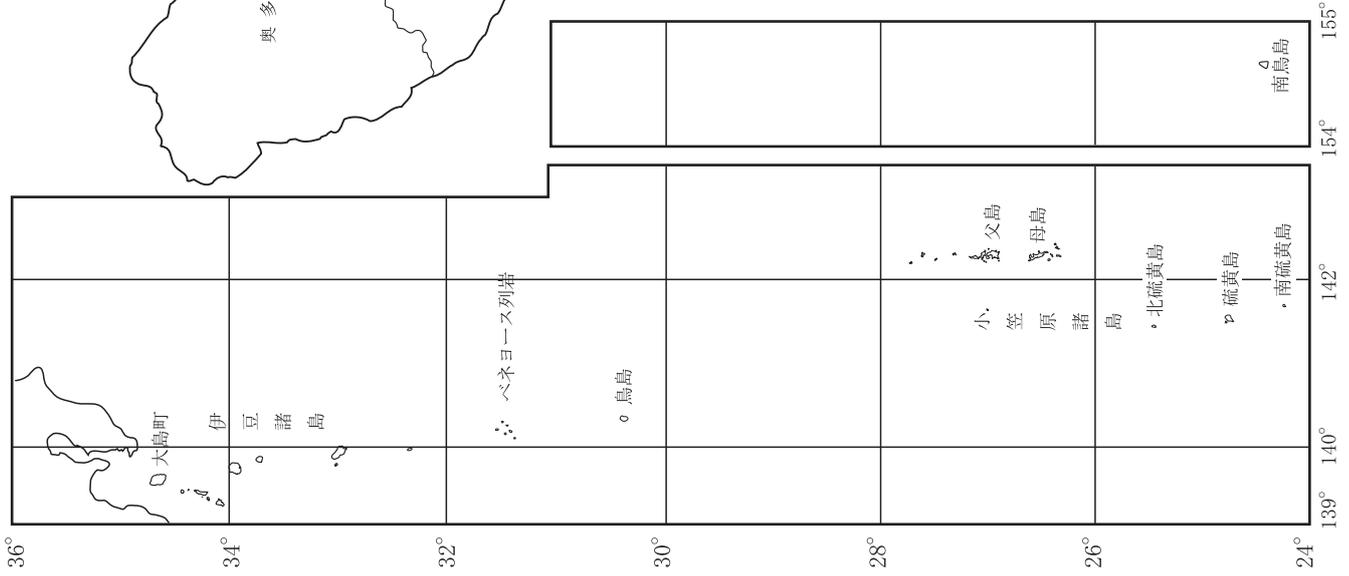


第2図 遺構分布図



第6図 出土遺物

発表遺跡位置図



4: 染地遺跡

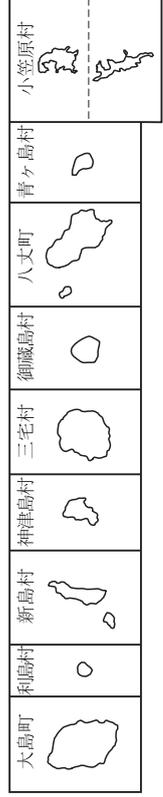
3: 高輪南町遺跡

1: 国史跡鈴木遺跡

5: 下野田遺跡

2: 堂ヶ谷戸遺跡

6: 国史跡八王子城跡



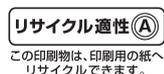
【要旨執筆者一覧】

- 発表 1 小川 望・高田賢治（小平市地域振興部）
発表 2 品川裕昭（世田谷区教育委員会）
発表 3 橋本 望（東京都埋蔵文化財センター）
発表 4 間 直一郎（東京都埋蔵文化財センター）
公開講演 寺田良喜（日本考古学協会会員）
発表 5 村上育士（東京都埋蔵文化財センター）
発表 6 村山 修（八王子市教育委員会）

東京都遺跡調査・研究発表会 47 発表要旨
令和 3 年 11 月 21 日発行

東京都教育委員会印刷物登録令和 3 年度第 40 号

編 集 東京都教育委員会
（公財）東京都スポーツ文化事業団
東京都埋蔵文化財センター
発 行 東京都教育委員会
印 刷 まこと印刷



古紙パルプ配合率60%再生紙を使用しています